JSMR Newsletter
多文化関係学会ニュースレター
Japan Society for Multicultural Relations
多文化関係学会
第43号
2023年6月

目　次

■多文化関係学会第22回年次大会について　2
2023年度年次大会のご案内…2　大会概要のご案内…2
研究発表応募要項…3　石井奨励賞…3
大会までのスケジュールと参加費…4
■新理事会　5
会長 挨拶…5
理事・各地区研究会委員長…6　幹事…6
■2022年度理事会議事録抄録　7
■地区研究会報告　9
関東…9　関西・中部…10　中国・四国…11
■地区研究会案内　12
北海道・東北…12　中国・四国…12
■お知らせ　13
Web管理・広報委員会より…13　事務局より…13
新入会員紹介…15　学会誌編集委員会より…15
学術委員会より…15　NL委員会より…16
■編集後記　16

CONTENTS

■Announcements of the 22th Annual JSMR Conference　2
About Conference…2 Announcement of Conference Overview…2
Call for Papers…3 The Ishii Yoneo Award…3
Future Schedule and the Conference Fee…4
■New JSMR Board　5
The JSMR President…5 New Board Members…6 New Inspectors…6
■Records of the 2022 Board Meetings　7
■Reports from the Regional Study Meetings　9
Kanto…9 Kansai・Chubu…10 Chugoku・Shikoku…11
■Announcements on the Regional Study Meetings　12
Hokkaido・Tohoku…12 Chugoku・Shikoku…12
■Announcements　13
From the Web・Public Relations Committee…13
From the Business Office…13 Introducing New Members…15
From the Journal Editorial Committee…15
From the Academic Affaires…15
From the News Letter Committee…16
■Editor’s Notes　16

発行：多文化関係学会　http://www.js-mr.org/

多文化関係学会 第22回 2023年度年次大会

9月9日(土)・10日(日)　開催

「地域社会にいきる多文化協働のかたち：異分野をつなぐ『縁側』知の実践」

年次大会準備委員長　小林 浩明（北九州市立大学）

新型コロナウィルス感染拡大防止策が終了し、久しぶりに日常が戻りましたが、学会員の皆さまは、いかがお過ごしでしょうか。日常が戻ったとは言え、その日常は、既に過去のものとは異なる新しい日常であり、言葉の面では、いささかの矛盾を抱えているようにも感じます。2019年度第18回年次大会（於東京未来大学）以来、4年ぶりに対面開催を予定しております。皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げます。

大会専用Webサイト：**https://sites.google.com/view/tabunka-2023/**

大会概要のご案内（テーマ・企画内容　他）

2023年の年次大会は、「地域社会にいきる多文化協働のかたち：異分野をつなぐ『縁側』知の実践」をテーマに、9月9日(土)と10日(日)の2日間、北九州国際会議場で開催いたします。また、前日の8日（金）には、プレ企画として、九州の玄関口である北九州に親しんでいただける企画を考えております。＊詳細は、後日お知らせします。

【基調講演】

講演者：神吉 宇一氏（武蔵野大学）

「共生社会を実現するための日本語教育とは」「日本語教育と地域・社会の連携－日本語教育の社会的役割とは」「公的日本語教育を担う日本語教師に求められるもの」など、日本語教育をめぐるさまざまな分野・立場の人びとの（多文化）協働について、幅広い分野・領域の視点を扱いながら、日本語教育の実践を行い、同時に研究もしていらっしゃいます。また、文化庁の地域日本語教育アドバイザーや文化審議会国語分科会委員などの任に就き、国の日本語教育の制度設計にも深く関わっています。そして、「日本語教育推進に関わる法律」が2019年に成立するために、多大なる貢献をされたことが大きく評価され、2021年度日本語教育学会より「学会賞」並びに「学会活動貢献賞」を受賞されています。

【大会シンポジウム：九州・沖縄地区研究会企画】

メインオーガナイザー：松永 典子（九州大学）

１．テーマ：「多文化共生における多分野・多領域の協働－JICAの取組事例から（仮）」

２．講演者：JICA九州所長、多文化共生推進員

事例報告：宮崎大学のバングラディシュからのIT人材受け入れ・支援、B&M企業（宮崎）による企業の多文化共生サポート

九州・沖縄地区会員による報告

【大会運営委員会企画セッション】

ファシリテーター：小林 浩明（北九州市立大学）、岡部 大祐（順天堂大学）

1. テーマ:「縁側」知コミュニティの創出～分野・領域を超えた研究・実践コミュニティの形成をめぐって
2. セッションの目的：多文化関係学会の設立理念を実現するためには、分野・領域を超えた研究・実践コミュニティの創設が欠かせませんが、ある日突然そのようなコミュニティが生まれるわけではありません。20周年記念誌で掲げた「縁側」知の生成がその第一歩になるのではないでしょうか。「縁側」で人びとが集い、交流しながら、関係を築くように、我々も年次大会という場で、分野を超えて人びととつながり、協働していくことから始めませんか。

研究発表応募要項（申し込み先・締め切り・抄録提出等）

※ ニュースレター配信時には、発表申し込みの受付は、既に終了しています。ご注意ください。

発表申込期間：2023年5月1日（月）～5月31日（水）

申込先：下記のグーグルフォームからお申込みください。

https://forms.gle/HJ5caVEDGZoboY7CA

☆ 査読結果は、6月末を目途にGmailのアドレスで通知いたしますので、迷惑メールのフォルダに振り分けられる恐れがございます。通知時期に結果が届かない場合は、お手数ですが、迷惑メールのフォルダのご確認もお願いいたします。

☆ 査読結果通知後、発表予定者は発表内容の抄録原稿をGoogle formにファイル添付をしてお送りいただくことになります【7月31日（月）必着】。
詳細は採択可否のメールでお送りします。抄録執筆要綱を熟読の上、テンプレートを使用してご作成ください。

石井奨励賞

第21回年次大会・石井奨励賞審査結果の報告

第21回年次大会のおける、石井奨励賞の審査結果は「該当者なし」となりました。以下、審査員による審査の講評となります。

受賞理由・講評

審査結果の説明：今回の石井奨励賞には2名より応募があり、学術委員会より選出された3名の審査員が審査を行いました。抄録審査、口頭発表審査の結果、該当者なしとの結論を得ました。審査結果の概要は以下の通りです。

【第1次審査】

多文化関係学への貢献度、研究のレベル、学問的論理性、独創性、抄録形式について審査を行い、2名共に合格とさせていただきました。

【第2次審査】

抄録では判明し得なかった点について、発表の仕方・説得力を加えて、協議を行ったところ、2名とも興味深い研究成果を示してはいるものの、それぞれに看過しがたい課題が見受けられ、合格（石井奨励賞の授与）には至りませんでした。

【今回の審査全体について講評】
2名共に、テーマについては大変興味深い内容のため、下記の点に注意して、引き続き研究を続けてほしいと審査員一同願っています。
抄録については、問題設定、先行研究、方法論、調査対象や結果の提示の仕方について今以上に批判的かつ学術的な視点で作成してください。特に、一人の候補者は、抄録・口頭発表ともに研究成果が手際よくまとめてありますが、研究において主題化された概念を裏付ける事例の選定や分析においてやや説得力に欠けており、もう一方の候補者は、口頭発表と比較すると、誤字脱字も含め抄録の時点での完成度が低い点が審査結果に大きく影響をもたらしました。
発表の仕方については、抄録ほどの問題はありませんでしたが、質疑応答の際に、研究のキーとなる部分について、しっかりと準備しておく必要があります。

石井奨励賞は次世代を担う研究者のキャリアを支援する制度です。石井奨励賞へ挑戦いただくことで、本学会の学術活動が活性化し、研究水準の底上げにつながることも期待されます。応募資格に該当する会員には、奮って応募いただければ幸いです。

大会までのスケジュール・参加費

スケジュール
・**5月31日（水）**発表申し込みの締切日（必着）
・**6月末**　発表申し込み者への審査結果の通知と抄録作成依頼
・**7月31日（月）**抄録提出の締切日（必着）
・**8月31日（木）**大会参加事前申込および大会参加費事前支払い期限
・**8月末**　プログラム完成版の発表
・**9月8日（金）**プレ企画
・**9月9日（土）・10日（日）**年次大会当日
※ 対面開催に戻りますが、以前のように抄録集を紙媒体で作成しませんので、予めご承知おきください。

大会参加費

種別	事前払い（Peatixのみ）	前日までの支払い（Peatixのみ）
正会員・シニア会員	3,000円	5,000円
学生会員	1,000円	2,000円
非会員	4,000円	6,000円
非会員学生	2,000円	3,000円
学部生	500円	1,000円

大会参加費の支払いは、Peatixのみとなっています。ご注意ください。
※ 大会参加費については、4年ぶりの対面開催でより多くの方に参加していただけるよう、従来よりも低めに設定しております。

年次大会に関する問合せ先
大会専用のアドレスjsmrconference@gmail.comへお問い合わせください。

第22回年次大会運営委員会
石黒 武人（立教大学）、岡部 大祐（順天堂大学）、小林 浩明（北九州市立大学）、申 知元（神田外語大学）、田中 真奈美（東京未来大学）　＊五十音順

★理事会が新しくなりました★

■今年4月より、新たな理事体制となりました。
会長の挨拶と共に、新しい理事・監事をご紹介します。

会長　挨拶

笠原 正秀（椙山女学院大学）

「ウィズ・コロナ」の時代を迎え、つながる場の提供を

　このたび、多文化関係学会第10期の会長を務めることになりました、椙山女学園大学の笠原正秀です。これからの2年間、当学会の発展に少しでも寄与できるよう、その責務を果たして参りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。私を支えていただく執行部には、副会長に石黒武人先生（学術）と渋谷百代先生（実務）をお迎えし、事務局長は石井英里子先生に継続してお願いしております。その他、今期、学会運営にあたる理事会の布陣はこちら（https://js-mr.org/configuration/）をご覧ください。これまでさまざまな場面で活躍されてきた先生方に各種委員長を務めていただく体制を敷くことができました。お引き受けいただいた先生方には、この場を借り、改めて御礼申し上げます。これからよろしくお願いいたします。

　私は、2002年に設立以来、丸20年（この6月で21年になりますが）、当学会に籍を置いてきました。青山学院大学での設立総会に参加した日のことがなつかしく思い出されます。そもそも当学会との出会いは、その前身である神田外語大学が毎夏、ブリティッシュヒルズ（福島県天栄村）を会場に開催していた「夏期セミナー」でした。久米昭元先生に薦められて研究発表をさせていただいたことがその契機となりました。ブリティッシュヒルズでの2泊3日は、著名な先生方とさまざまな場面で直接ことばを交わすことのできる、たいへん有意義な時間でした。私にとっては年に一度の楽しみな場でもありました。

　あれから20有余年、私自身も今年還暦を迎え、その間、世の中にはいろいろなことがありました。特筆すべき出来事として、未曾有の災害とも言えるコロナ禍があります。ただ、コロナ禍は過去のことではなく、いまだ現在進行形のことかもしれません…。新型コロナウイルス感染症によるパンデミックは、全世界的に、社会のさまざまなことに大きな変革が求められる転換点となったのはまぎれもない事実です。そして、直近のホットな話題としては、「対話型AI」「生成型AI」と呼ばれるChatGPT等の広がりがあります。Google社やMicrosoft社などの大手IT企業もそのプラットフォームを提供しています。そうした状況を受け、産学官ともに、こうしたAIとどのように向き合っていったらよいのか、模索を始めています。コロナ禍を境にさまざまな形でのコミュニケーションの時代を迎えました。これまで以上に多様性が問われる時代となり、「多様性を尊重し多文化間の関係性やそのあり方を考える」当学会の存在意義はますます大きくなったと言えます。

　こうした社会に大きなうねりが起きている真っ只中、前会長の田崎勝也先生は学術委員会委員長の岡部大祐先生とともに20周年記念事業として『「縁側」知の生成に向けて――多文化関係学という場の潜在力――』（明石書店）の発刊を行いました。世界が「ウィズ・コロナ」へと大きく舵を切った今、そのあとを引き継ぐ者としては、コロナ禍前に立ち戻り、「人と人との直接のつながり」を意識した方策を打ち出したいと思っています。具体的には、入会された方々にいかに当学会に帰属意識を持っていただき、長く居続けてもらえるか、そのしくみづくりをしなくてはいけないと考えています。せっかく入会しても、3年ほどで退会されてしまうケースが多いと聞きます。新しく入会された方々に心地よく居てもらえる場所 、 20周年記念出版物のタイトルにあ

った「縁側」のような場所、あるいは2017年度の年次大会の折、学術委員会が企画した「砂場」のような場所で、「研究」という共通項から、さまざまな形で他の会員とつながることのできる「場」の提供が必要ではないかと思っています。私の任期のうちにそうしたしくみづくりができるかわかりませんが、私たちの共通項である「研究」をキーワードに、会員同士のつながりの構築、特に新規会員の方々が居心地よくいられる「場」の提供は、会員数がなかなか伸びていかない現状を鑑みると喫緊の課題であると考えています。

コロナ禍を境にデジタル化も新たな次元に突入し、それにあわせて人間のコミュニケーションのあり方も大きく変化してきました。その変動していく時代の中で、会員のみなさまの研究活動をつなぐ「場」となることを念頭におき、会長としてその責務を果たして参りたいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

理事・各地区研究会委員長・委員（五十音順）

氏　名	所　属	役　職
石井 英里子	鹿児島県立短期大学	事務局長
石黒 武人	立教大学	副会長
岡部 大祐	順天堂大学	学術委員会委員長
奥西 有理	岡山理科大学	学会誌編集委員会委員長
笠原 正秀	椙山女子学園大学	会長
河野 秀樹	目白大学	学術委員会委員
小林 浩明	北九州市立大学	2023年度大会委員長/九州・沖縄地区研究会委員長
坂井 二郎	東京福祉大学	ニュースレター委員会委員長
猿橋 順子	青山学院大学	選挙管理委員会委員長
渋谷 百代	沖縄大学	副会長・学会誌編集委員会委員
申 知元	神田外語大学	財務委員長/常設大会運営委員
田中 真奈美	東京未来大学	常設大会運営委員
千葉 美千子	北海道銀行	北海道・東北地区研究会委員
趙 師哲	山口大学	中国・四国地区研究会委員長
内藤 伊都子	東京福祉大学	ニュースレター委員会委員
中野 遼子	東北大学	学会誌編集委員会委員
藤 美帆	広島修道大学	学術委員会委員
矢元 貴美	大阪大学	関西・中部地区研究会委員長/学会誌編集委員会委員
横溝 環	茨城大学	Web管理・広報委員会委員長
叶 尤奇	神田外語大学	関東地区研究会委員長
李 鳳	北海商科大学	北海道・東北地区研究会委員長

監事（五十音順）

伊藤 明美	藤女子大学	会計監査
灘光 洋子	元立教大学	会計監査

■ 変更が生じた場合やこの他の各委員会委員および地区研究会委員につきましては、決定次第、氏名・所属を学会ホームページにてお知らせいたします。

2022年度 多文化関係学会 理事会議事録 抄録

■第4回理事会 議事録

日　時：2023年3月12日(日）10:00～11:00、12:00～12:50
場　所：椙山女学園大学国際コミュニケーション学部4階415室
出　席：田崎、石井、申、叶、畠中、河野、小坂、内藤、小林、笠原、田中、渋谷
委任状：馬場、伊藤、江藤、矢元（宇治谷代理）
欠　席：岡部　　（敬称略・順不同）

議事次第

1. 報告事項

(1) 事務局からの報告

- 4月から公開予定で進めていた新しい会員専用サイトについては、現在最終確認の段階として、3月中に動作確認をし、とりまとめた修正依頼する。

→新会員専用サイトの運用については、審議事項へ

(2) 財務委員会

- 今年度分の経費等の処理締め切り（3月末日）が迫っているため、未処理の経費については忘れず手続きすること。

(3) 地区研究会委員会からの報告

- 関東地区研究会：2月4日にハイブリッド方式で研究会を開催した。参加登録者は31名だったが、当日の参加は25名程度であった。
- 中国・四国地区研究会：2月18日にオンラインにて研究会を実施した。事前の参加登録者は8名だったが、当日は5名の参加となった。
- 九州地区研究会：1月7日にハイブリッド方式で研究会を開催した。当日の参加者は対面6名、オンラインが4名だった。

→オンラインは参加しやすい形態ではあるが、同時に当日不参加となりやすい点もある。開催の方法に関する工夫は今後の課題とする。

(4) 学会誌編集委員会からの報告

- 第19巻の発送を終えたが、在外会員の発送先未確認状態にある1名分が保留となっている。

(5) その他

- 特になし

2. 審議事項

(1) 事務局設置場所について（副会長：田中）

- 事務局の設置場所を2023年10月に現事務局長の研究室に移すこととし、それまでは現在の住所（東京未来大学モチベーション行動科学部田中研究室）を引き続き事務局として使用し、その間、田中真奈美先生を事務局員としたい旨の説明があり、承認された。

(2) 新会員専用サイトについて（事務局長：石井）

- 5月1日に正式に新サイトへ移行する（学会ウェブサイトにあるリンクを変更する）ことを目標として作業を進めることが了承された。
- 2022年度に組んだ予算は、そのまま2023年度に持ち越しとする。
- 2023年度会費納入については、新サイトに移行させてからとするため、会員には移行前に会費振込をしないようメーリングリストを通じて注意喚起を行う。ただし、新規入会については通常通り受付する。

→年次大会の発表締切や学会誌論文審査までに会費納入が完了できる十分な告知・振込期間を確保するよう振込開始日を設定することとする。

- 学会ウェブサイトと会員サイトの管理については、事務局とWeb管理・広報担当との間で確認する。
- 会員検索機能を利用できる「管理者」は事務局内を想定しているが、その指定範囲を具体的にどのように設定するかは次期理事会での検討事項とする。

(3) 2021-22年度新設の各委員会について（副会長：田中）

- Web サイト等リニューアル委員会：新たな会員専用サイトへの移行まで現委員が構成員となり継続することが承認された。なお、Web管理・広報担当理事交代による引継ぎのため、現担当理事に加えて新担当理事も委員会に参加することが確認された。
- 将来構想委員会・地区研究会連絡委員会・学術連絡委員会：今後については次期理事会での検討事項とする。
- 大会運営委員会： 2023-24年度は田中先生と申先生が常任委員となることが決まっているが、委員をあと数名追加で募ることにする。

(4) 日本学術会議協力学術研究団体への実態調査について（事務局長：石井）

- アンケート回答作成について、過去の同アンケートへの回答を参考にしつつ、今期理事が担当する部分について速やかに記入協力することが確認された。

(5) 2023年度年次大会について（大会運営委員長：小林）

- 運営は大会運営委員会が行うが、常任委員と会場担当委員がどのように役割分担するかは今後検討する。会場担当委員を九州地区で今後募集する予定である。
- 会場は、北九州国際会議場（https://hello-kitakyushu.or.jp/kokusai-kaigi/小倉駅北口徒歩5分）とする。※条件（参加者のべ100名以上、50泊以上）を満たせば助成金制度がある。
- オンライン参加については、状況を見つつ今後検討する。
- 開催日程は、会場が利用できる9月8日－10日または10月6日－8日の候補から、協議の結果、9月8日－10日と決定した。
- プレカンファレンス・総会・基調講演用に200人規模1室、研究発表用に2－3部屋を用意する。
- 抄録については、印刷はせず、電子ファイル化することが確認された。
- 大会テーマや懇親会についてはこれから委員会内で検討する。

(6) その他

- シニア会員から、“終身会員”のような制度導入の問い合わせがあった。現行の会員区分の再検討も含め、次期理事会で検討することとなった。
- 学会誌バックナンバーの保管料金が年間6万円程度かかる一方で販売による売上は3万円程度にとどまっている状況を鑑み、バックナンバー在庫をどうするか、次期理事会で検討してほしい旨を申し送りとした。
- 地区研究会の予算については、会則に定められたルールで計算されるため、新しい会員専用サイトによって地区研究会所属人数が明らかになったところで確定させることを確認した。
- 学会活動資金安定のため、会費の値上げについて次期理事会で検討を始めることとする。

地区研究会報告

■関東地区研究会報告

日　時：2023年2月4日（土）10：00～12：00
方　法：対面（神田外語学院）＆オンライン（ZOOM）ハイブリッド開催
講　師：石黒 武人先生（立教大学）、岡部 大祐先生（順天堂大学）、中原 裕之先生（理化学研究所）、根橋 玲子先生（明治大学）、叶 尤奇先生（神田外語大学）
テーマ：関東地区研究会×学会20周年記念事業「縁側ダイアローグ～これからの多文化関係学～」

2023年2月4日（土）・10時～12時、2022年度第2回関東地区研究会を対面・オンラインのハイブリッドで開催し、参加者は合わせて20名程度参加した。学会創設20周年記念事業の一環として、20周年記念出版著書『「縁側」知の生成に向けて：多文化関係学の潜在力』（明石書店）が刊行され、その著者5名からご講演を頂いた。

まずは順天堂大学の岡部先生が「『縁側』知の創出を目指して」を演題として、記念出版の出発点を紹介してくださった。具体的には、学会創設10周年の時点で『多文化社会日本の課題ー多文化関係学的アプローチ』（明石書店）を通じて提示された多文化関係学の論点（領域横断性、多様性の尊重など）を概観しつつ、これまでの多文化関係研究では十分に扱われてこなかった諸側面や時代の変化に応じて視野に入れる必要がある論点（ポスト・ヒューマニズムやデジタル・コミュニケーション等）を提示した。また、題名にもあった「縁側」は、来客が完全に家に入ることなく、腰掛け、世話話をする相互関与が起こる場であると説明して、対話と理解の可能性を高めることに繋がると述べた。

次は、立教大学の石黒先生が第1章「多文化関係学的アプローチの意義とその展開：20周年現在からの批判的考察と提言」の内容を紹介してくださった。本学会10周年記念出版著書の「多文化社会日本の課題：多文化関係学からのアプローチ」の序章を要約しながら、10年経過した後の2022年現在の視点から内容を批判的に考察し、多文化関係に関するコトバの再考、文化と人に限定されないより広い観点からの考察視点が求められるなど、今後への提言をなさった。

その後、叶先生、根橋先生、中原先生が第11章「文化神経科学の視座から見た文化と個人との関係」の内容を紹介してくださった。これまで20年の研究動向を「実験法等を用いる量的研究は限られている」とまとめた上で、定量的に「文化」をダイナミックで、動的なプロセスとして捉える文化神経科学の諸研究を紹介した。今後の多文化関係学における研究では、人間の認知・行動、文化、脳神経活動、遺伝子という4者の相互作用に着目する視座を取り入れることによって、文化集団をより重層的・多面的に捉えられるようになると、多文化関係学の今後の展望に研究上の手がかりを提示した。

質疑応答およびディスカッションでは、石黒先生が言及した「マルチスピーシーズ」について、及び叶先生が持ち出した実験法等を用いる研究方法に関して、参加者の方々からご質問・ご意見が提供された。発表者によって補足説明と応答が行われた。発表と質疑応答の時間が終了した後も、対面で参加された方々により自由ディスカッションの形で意見交換と情報共有が行われた。

報告者：趙 師哲（山口大学）

■関西・中部地区研究会報告

日　時：2023年3月12日（日）14:00～16:00

方　法：対面開催（於 椙山女学園大学星が丘キャンパス）

講師と講演題目：

①鳥塚 あゆち先生（関西外国語大学）

「アンデス高地における人間・家畜・自然の関わり合いと牧畜文化の生成」

②出口 朋美先生（近畿大学）・小坂 貴志先生（神田外語大学）

「多文化社会の対話的成り立ちー両義・多声的ラップのリリック内容分析を通して」

2023年度の研究会は対面形式で開催し、約20名にご参加いただきました。2022年10月に『「縁側」知の生成にむけてー多文化関係学という場の潜在力』が出版されて間もないこともあり、その内容に関する企画としました。特に文字にすると伝えきれない部分が多いと思われる第8章と第9章の執筆者の方々に、原稿には書ききれなかった事柄も盛り込み、各章の内容を詳しくご講演いただきました。

鳥塚 あゆち 先生（関西外国語大学）

鳥塚先生からは、在来家畜と外来家畜とで構成されているという、文化の混淆が見られるアンデス牧畜における人間と家畜と自然との関わり合いと、それによって生成される牧畜文化についてお話しいただきました。日々のルーティーンの中でも起こる予期せぬことと、その出来事への対応に見られる多種間の絡まり合いが、マルチスピーシーズ民族誌を援用して考察され、人間以外のものから主体性を奪わずに文化を見ることの重要性が指摘されました。人々の生活の様子や、フィールドワーク中の先生の様子を捉えた写真もふんだんにお示しいただき、冒頭で挙げられていた、あまり扱われてこなかった地域や研究対象に目を向ける、という狙い通り、異なる学問的背景の研究内容に参加者は引き込まれていました。

小坂 貴志 先生（神田外語大学）

出口先生と小坂先生からも、扱われることが少なかった研究対象であるラップを取り上げていただきました。小坂先生からは、理論的参照枠組みとしてカーニヴァル論と対話論、そして、対話論の概念と関係する、応答性や多声性といったラップの対話論的性質をご説明いただきました。出口先生は、映像や音楽を用いてラップ作品を示しながら、多文化社会の対話的成り立ちを論じられ、参加者は興味深く聞き入りました。フィメールラッパーがフェミニズムの視点を持ちながらアイデンティティーを表現している事例や、ラッパーとラップを解釈する人との対話が実践されている事例には両義性や外在性も見られると述べられました。ラッパーによる対話が他者にも新たな声をもたらしており、若者世代に影響を与える芸術や音楽を考察することの重要性も指摘されました。多文化関係学の可能性が示唆される研究会となりましたし、久々の対面開催により、顔を見ながらご講演を伺えることや意見交換ができたことも有意義でした。今後、より多くの方に関心をお寄せいただける研究会を開催したいと考えております。皆様のご協力・ご参加のほど、よろしくお願い申し上げます。

報告者：矢元 貴美（大阪大学）

■中国・四国地区研究会報告

日　時：2023年2月18日（土）14:00～16:00
方　法：オンライン(ZOOM)
講　師：鳥越 麻美様（岡山大学日本留学情報センター）
テーマ：「東南アジアからの日本留学動向～ミャンマー人留学生の動向を中心に～」

2022年度の中国・地区研究会は、2023年2月18日にzoomを使用して開催された。当初は8名の方が参加を希望されていたが、当日の参加者は5名であった。

講師の鳥越様は2017年から岡山大学の国際部にてミャンマーから日本へ留学を希望する学生へ助言や支援活動をされている。日本は以前から、東南アジア諸国連合（ASEAN）加盟国、特にインドネシアやマレーシアから多くの留学生を受け入れてきたが、これに加えてミャンマーからの留学生を増やすことが目的である。2019年には、同大学にて文部科学省支援の「日本留学海外拠点連携推進事業（東南アジア地域）」を受託し、日本への留学者数を5年間で1.5倍にすることを目標に事業を進めてきた。対象諸国もミャンマー以外に、バンコク、ラオス、カンボジアなどASEAN全域に拡大した。同年、すでに留学者数が30万人に達したとのことだったが、2020年の新型コロナウィルス感染拡大により留学者はいったん減少した。

昨今、東南アジアでは、日本への留学者数が減る国、増える国と様々であるが、ミャンマーでは日本への留学熱が劇的に高まっているという。この背景には、2011年より民政化へと舵を切り、国内の教育環境も整えられていたミャンマーであったが、2021年2月の軍事クーデターによる社会情勢が不安定なこと、またコロナ禍による教育機関の一時閉鎖により、若者が海外へ留学や就業の機会を求めていることがあげられる。

留学の傾向として、実務に直接結びつくビジネスや工学系分野を希望する若者が多いが、実際は人文・社会科学系の留学が主流となる。工学系へは数学や理科に重点が置かれるが、ミャンマーでは近年12年制へ変更されつつあるが、これまでの基礎教育期間は小学校5年間、中学校4年間、高等学校2年間の合計11年間であったため、日本と教育のギャップがあるという。また、日本で留学生活を送る中で一番の障壁は、言語の違いである。そのため、ASEANからの留学生のうち、日本留学を選択するのはわずか16%、55%は英語圏へ留学する。

東南アジアからの留学生を日本に受け入れる課題は多様である。渡日前、そして在学中の日本語学習支援はもちろん、日本の文化・習慣のオリエンテーションの必要性があげられた。また、ミャンマーでの経済状況の悪化により、留学生の85％が「一部奨学金が必要」もしくは「全額必要」としているが、渡日前に獲得できる奨学金は少ないという。

鳥越様のお話を通して、日本政府の後援もあり、ASEAN加盟諸国から想像以上に多くの学生が日本に留学していること、そして彼らが日本社会に合わせるために準備が必要なことを学んだ。同時に留学生が日本社会に合わせるのではなく、日本が多文化共生化する社会へかわることも望まれると感じた。講演後は30分ほどディスカッションタイムとなったが、参加者からは留学生の卒業率や卒業後の就職状況などの質問が飛び交い、有意義な会となった。鳥越様にはお忙しい中、ミャンマー人留学生について、現地の社会的背景と日本留学最新情報、日本社会の外国人受け入れについて情報提供いただき感謝いたします。

報告者：江藤 由香里（山陽学園短期大学）

地区研究会案内

■北海道・東北地区研究会

日　時：2023年10月7日（土）14：00～16：00
方　法：ハイフレックス型（対面＋ZOOM：北海道商科大学）
講　師：崔 碩鎭　氏
テーマ：「韓国における戦後政治体制の形成とその持続性について：日本との比較を兼ねて」

■中国・四国地区研究会

日　時：2023年11月11日（土）14：00～15：30
方　法：オンライン
講　師：羽渕 由子氏（周南公立大学）
テーマ：「ことばの壁をどう乗り越えるか：日本語が母語でない人から話を聴く方法」

■概要：コミュニケーション能力が乏しいために、自らの考えや思いをうまく表現できない人たち（供述弱者：子ども、障害者、外国人など）から被害体験や目撃情報をできるだけ負担をかけずに正確に聴取するために開発された「司法面接」について紹介くださいます。司法面接は、近年では教育現場での事件や事故、いじめの聞き取りなどでの活用も広がっています。本講演会では、前半に「司法面接」の理論や背景について解説し、後半では日本語が母語でない人から正確に話を聴く方法について研究事例を紹介くださいます。

■参加申し込み及び問い合わせ先
参加を希望される方は、下記へ11月10日（金）までにメールにてお申し込みください。申込者にはWebexのURLをメールでご案内いたします。
趙　師哲 zhaoshizhe58@gmail.com

■オンラインでの開催ですので、ぜひ他地区の会員の方もご参加をいただけましたら幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

お　知　ら　せ

Web管理･広報委員会より

≪登録事項の更新をお願いします≫

■会員専用サイトでの所属・住所等の変更

ご所属・e-mailアドレスなど会員登録情報の更新をお願いいたします。会員登録情報の変更は会員各自で行えます。登録情報を更新しなければ学会からのお知らせが届きません。登録情報に変更があった場合は更新をよろしくお願いいたします。また、e-mailアドレスにつきましては、現在使用されていないアドレスの方がいらっしゃいますので、今一度ご確認ください。なお、IDやパスワードがお分かりにならない方は横溝tamaki.yokomizo.drj＠vc.ibaraki.ac.jp（全角の＠を半角の@に変更してください）宛に御連絡下さい。

■登録情報の更新手順

1. 多文化関係学会ホームページ（URL: http://www.js-mr.org/）
2. ページ下部にある「学会員専用サイトはこちら」をクリック
3. 会員番号・パスワードを入力し、ログインボタンをクリック
4. 登録情報更新をクリック
5. 変更点を修正し、一番下の更新をクリック

（Web管理・広報委員会委員長　横溝 環）

事務局より

新年度を迎え、やっと春らしくなってきたと感じておりましたら、再び肌寒い気候が戻って参りました。新型コロナウイルス感染症の位置づけは、5月8日よりこれまで位置づけられていた、「新型インフルエンザ等感染症」であるいわゆる2類相当から、5類感染症になりました。これからは、個人の自主的な取組をベースとした対応に変わります。慣れてしまったマスク生活にも、徐々にお別れする準備をしているところです。会員の皆様にはお健やかにお過ごしのことと存じます。これまでに引き続き、事務局一同、皆様のお力をお借りしながら、今年度も事務局運営を行っていきますので、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。以下、事務局からのお知らせです。

■事務局所在地について

〒890－0005 鹿児島県鹿児島市下伊敷1－52－1
鹿児島県立短期大学 文学科 石井英里子研究室内 多文化関係学会事務局
＊Eメールアドレス admin＠js-mr.org（全角の＠を半角の@に変更してください）
事務局の所在地が上記に変更になりますと前回のニュースレターでお知らせいたしましたが、諸手続きの都合上、HP上の事務局は、しばらくの間、前事務局長の田中真奈美先生の研究室になっております。ご理解よろしくお願い申し上げます。

■学会ホームページ「学会員専用サイト」における登録情報の更新について

学会ホームページでは、登録情報の更新などを行える「学会員専用サイト」があります。住所、所属等に変更がありましたら、情報の更新していただくとともに、送付物の住所を管理している事務局にもご連絡ください。

現在、ホームページの更新の途中でして、入り口がわかりにくくなっておりますが、次のリンクをご使用ください。

多文化関係学会の学会員専用サイト
https://smallwave-info.ssl-xserver.jp/js-mr_org/membership/

なお、学会員専用サイトへのログインには、会員番号とパスワードが必要です。お忘れになった方は、【お名前の読み方】を明記の上、事務局・石井英里子（admin＠js-mr.org　全角の@を半角の＠に変更してください）までお問い合わせください。

■学会費の納入について

2023年度の学会費納入より、会費納入システム導入を予定しております。事務局から納入のご案内があるまで、お控えください。また、すでに納入された方は、事務局・石井英里子（admin＠js-mr.org　全角の@を半角の＠に変更してください）までご連絡をお願いします。
2021年3月31日をもって、これまでの委託先（株式会社アクセライト）との業務提携が終了いたしました。また昨年の総会で2023年度より新しい委託先（しくみねっと）が決定いたしました。順次会員様の情報の移行作業を行っており、6月頃にはそのサイトが運用開始予定です。新しい会員情報サイトが完成次第、MLにてお知らせいたします。この会員サイトにはメールアドレスが必要になります。この件に関しましてご質問等ございましたら、事務局・石井英里子（admin＠js-mr.org　全角の@を半角の＠に変更してください）までお問い合わせください。その際、メールの件名は「多文化関係学会」とし、ご自分の氏名、会員番号、ご用件をお書きください。また、退会希望の場合も、会費納入状況の確認と合わせて、事務局へご連絡ください。3月末日までにお知らせがない場合は、自動的に会員資格が更新されます。

■学会誌『多文化関係学』バックナンバーの販売について

学会誌の販売は、株式会社インターブックスに委託いたしております。 学会誌バックナンバーのご購入をお考えの会員の方々は、恐れ入りますが、学会事務局ではなくインターブックスにお問い合わせください。
ホームページ：http://www.interbooks.co.jp/
メールアドレス： info_ml＠interbooks.co.jp （全角の@を半角の＠に変更してください）
電話番号：03(5212)4652 ファクス番号：03(5212)4655
なお、学会誌『多文化関係学』の論文は、論文検索サイトJ-STAGEにおいて順次掲載されております。

（事務局　石井 英里子）

新入会員紹介（敬称略、入会順）

会員資格	氏名	所属	研究分野
正会員	李 娜	九州大学	人文学
学生会員	パク　ウギョン		日本語教育
学生会員	平野 遼	立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻博士後期課程	異文化コミュニケーション、英語教育
学生会員	張　氷穎	東京大学博士課程言語情報科学	会話分析、日本語教育、異文化適応、異文化接触
学生会員	張　馨文	関西大学大学院博士課程外国語教育学研究科外国語教育学	異文化コミュニケーション
学生会員	坂本　和泉		多文化共生教育、海外にルーツを持つヤングケアラー
正会員	周 悦		コミュニケーション
学生会員	山脇　佳	中京大学大学院博士後期課程社会学研究科	移民と教育／母語支援員の社会学的研究
正会員	佐藤　重人		中学生　創造性パーソナリティ　日中比較

正会員（2023年1月1日から2021年4月30日に入会された方）

学会誌編集委員会より

2023年度より学会誌編集委員会委員長を務めさせていただきます岡山理科大学の奥西有理です。本学会の学会誌「多文化関係学」は、前編集委員長および委員の先生方そして理事会関係の先生方の多大なご尽力により、現在様々な投稿区分（原著論文、探索的研究論文、総説研究、実践報告、書評/映像・展示評）があり、多様な研究成果を発表することができる充実したものとなっています。今までのスムーズな運営方法を受け継ぎながら会員の皆様の投稿・査読・掲載のプロセスが円滑に進むようサポートさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（学会誌編集委員会委員長　奥西 有理）

学術委員会より

「縁側」知の生成にむけての継続的活動

本学会は2022年に学会20周年を迎え、記念論集『縁側知の生成にむけて一多文化関係学という場の潜在力』を出版いたしました（会員の皆様はぜひご一読ください！）。本書及びその出版に至る過程で掲げられた「縁側知」の生成を目指し、各種取り組みを継続して行ってまいります。地区研究会や年次大会をはじめ、新たな企画も打ち出してまいります。第22回大会でも新しい取り組みに着手します。遠目に眺めるのではなく、ぜひ「縁側」に腰掛けて共に新たな知を構想しましょう。

（学術委員会委員長　岡部 大祐）

ニュースレター委員会より

■著作図書案内・書評・海外シンポジウム参加報告記事募集

ニュースレター（NL）委員会では、次回44号（2024年2月発行予定）掲載記事として、会員の皆さまの著作図書案内、海外シンポジウム参加報告、震災関連や多文化関係学会に関連した研究、関連学会参加報告記事などを募集しております。次の（1）から（3）の記事をNL委員会にご送付いただきますようお願いいたします。

募集する記事の内容

(1) 学会の趣旨に関連すると思われる著作・訳書などを出された場合
　募集対象とする著作の発行時期：2023年5月から2023年12月末まで
　書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の内容を200字程度で紹介

(2) 学会の趣旨に関連すると思われる著作で、会員に広く紹介することが望ましいと思われる場合
　募集対象とする著作の発行時期：2023年5月から2023年12月末まで
　書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の書評を200字程度でまとめる

(3) 学会に関連する海外のシンポジウムや震災関連のシンポジウム等、関連学会に参加された場合
　募集対象とする時期：2023年5月から2023年12月末まで

記事の送付期日：2024年1月9日
記事の送付先：NL委員会　坂井 二郎宛　jisakai＠ed.tokyo-fukushi.ac.jp （全角の＠を半角の@に変更してください）

■関連学会の大会紹介記事の募集

会員に紹介するのにふさわしい関連学会の大会情報を募集しております。具体的には、（1）学会名、（2）大会名、（3）大会テーマ、（4）大会日時、（5）会場、（6）その他詳細（120字程度）をお書きのうえ、NL委員会　坂井　二郎宛　jisakai＠ed.tokyo-fukushi.ac.jp （全角の＠を半角の@に変更してください） に送ってくださいますようお願いいたします。

（NL委員会委員長　坂井 二郎）

編 集 後 記

ニュースレター第43号をお届けいたします。今号では、第22回年次大会の概要をご案内しております。コロナ禍もようやく徐々に収束し今年は待ちに待った対面での開催となり、大会参加費も低めの設定となっておりますので、広く皆さまの研究活動の場になればと思います。年次大会の今後の詳細につきましては、以下の大会専用ホームページをご覧ください。

https://sites.google.com/view/tabunka-2023/

また、4月より理事会が新体制となりました。「将来構想委員会」や「若手会員リクルート委員会」の立ち上げなどの動きがあります。ニュースレター委員会では、今後も会員の皆さまのさまざまな研究の様子を、学会や地区研究会の活動、著書紹介等を通して、ご報告していきたいと思います。

（NL委員会：坂井 二郎・内藤 伊都子）